

新約時代の礼拝

使徒の働き 2章 37-42節

はじめに

私たちの教会では、毎月テーマを決めています。そして毎月第一週の礼拝の説教では、その月のテーマに従ってお話しています。2月のテーマは、「礼拝」です。

今日の聖書箇所には、教会が誕生した出来事が書かれています。イエス様は、私愆罪のために十字架に架かり、三日目に復活し、天に昇られた後、弟子たちに聖霊を遣わされました。聖霊に満たされたペテロは、エルサレムで大勢の人々の前で説教をしました。すると何と、三千人の人がペテロの言葉を受け入れ、洗礼を受けたのです。こうしてエルサレムに教会が誕生したのです。

1. 新約時代の礼拝

では、誕生したばかりの教会は、どのように神様を礼拝していたのでしょうか。

旧約時代の礼拝は、「神殿」が中心でした。しかしイスラエルの民は、バビロニア帝国によって滅ぼされ、「神殿」も破壊されてしまいました。そしてイスラエルの民は、バビロンへと強制移住させられました。「神殿」を失ったイスラエルの民は、「シナゴグ」と呼ばれる「会堂」で神様を礼拝することを始めました。「神殿」での礼拝が、「動物のいけにえ」が中心であったのに対し、「会堂」での礼拝は、「律法」が中心となりました。

誕生したばかりの教会の礼拝は、この「会堂」での礼拝の形式を受け継いだようです。「会堂」での礼拝は、「賛美」と「祈り」と「律法」の三つの要素から成っていました。

イエス様の時代は、「神殿」も再建され、「神殿」での礼拝と、「会堂」での礼拝が両方行われていたようです。イエス様は、「神殿」にも行かれましたし、安息日ごとに「会堂」での礼拝にも参加されました。

しかしイエス様が十字架に架かり、私たちの罪のための「宥めのささげ物」となってくださったことにより、「動物のいけにえ」を捧げる必要はなくなりました。イエス様の十字架が、私たちの罪をすべて贖ってくださったからです。「動物のいけにえ」は、イエス様を指し示していたに過ぎませんでした。ですからイエス様が十字架で完全な贖いを成した以上、「動物のいけにえ」を捧げる必要はなくなったのです。

そのため新約時代の私たちの礼拝は、「神殿」での「動物のいけにえ」による礼拝ではなく、「会堂」での「賛美」と「祈り」と「御言葉」を中心とする礼拝となったのです。

2. 罪の自覚

今日の聖書箇所には、ペテロの説教を聞いた人々のうち、三千人が洗礼を受けて、教会が誕生したという出来事が書かれています。37 節にはこの人々が、ペテロの説教に「**心を刺され**」、「**私たちはどうしたらよいでしょうか**」と言ったとあります。つまり彼らは、彼らは「罪」を自覚したのです。自分たちの罪がイエス様を十字架に付けたことを自覚したのです。自分の罪とイエス様の十字架が結びついたので。

誕生したばかりの教会の人々はみな、「罪の自覚」を持っていたのです。自分が罪人であること、イエス様が自分の罪のために十字架で死なれたこと、イエス様がいなければ、罪人の自分には望みはなく、滅びるほかないことを自覚していたのです。そして人々は、38 節にあるように、罪を赦していただくために、悔い改めてイエス様を信じ、洗礼を受け、聖霊を与えられて、教会が誕生したのです。

教会に集う人々には、罪の自覚が大切です。洗礼を受けても、教会を離れていく人がいます。そのような人たちの多くは、罪の自覚が足りないように思います。そして明確な悔い改めがなされていないように思います。「悔い改める」とは、人生の方向転換をすることです。使徒パウロが「**古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました**」(II コリント 5: 17)と言ったように、罪に従っていた人生に別れを告げ、イエス様に従っていく人生に歩む決心をすることです。クリスチャンになるということは、これまでの人生の延長ではなく、明確に新しい人生を歩み始めることです。

教会にとっては、罪の自覚が大切なのです。ですから礼拝において、「罪の告白」がなされる必要があるのです。毎週の礼拝において、罪を告白し、赦しを確信して、新しい歩みをする決心が必要なのです。

3. 使徒たちの教えを守る

今日の聖書箇所の 42 節には、誕生したばかりの教会が行っていたことが書かれています。「**彼らはずっと、使徒たちの教えを守り、交わりを持ち、パンを裂き、祈りをしていた**」。ここには、誕生したばかりの教会が行っていた四つのことが書かれています。一つは「使徒たちの教えを守っていたこと」、二つ目は「交わりを持っていたこと」、三つ目は「パンを裂いていたこと」、四つ目は「祈りをしていたこと」です。この四つは、そのまま新約時代の礼拝の四つの要素とも言えます。

私たち新約時代に生きる教会は、「使徒たちの教え」を守らなければなりません。「使徒たちの教え」は、旧約聖書をイエス様を指し示す書物として解釈する教えでした。そして、「使徒たちの教え」は新約聖書にまとめられました。その意味で、「使徒たちの教え」とは、旧約聖書と新約聖書の全体、つまり聖書の御言葉と言えます。

新約時代の礼拝では、聖書の御言葉が語られ、守られなければなりません。教会は、御言葉によって生まれ、御言葉によって成長するのです。I ペテロ 2: 2 には、「**生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、霊の乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです**」とあります。赤ちゃんがミルクがなくては成長しないように、クリスチャンも御言葉

がなければ成長しません。礼拝で語られる御言葉によって、人々は新しく生まれ、神様の子どもとして成長していくのです。

4. 交わりを持つ

新約時代に生きる教会は、「交わり」を持たなければなりません。「交わり」と訳される言葉は、「コイノニア」というギリシア語ですが、その意味は「共有する」とか「分かち合う」というものです。

誕生したばかりの教会は、自分の財産や所有物を売って、貧しい人たちを援助していました。つまり自分の物を共有し、分かち合っていたのです。「交わり」とは、自分の賜物を分かち合うことです。自分の賜物を用いて、人々に仕えることが「交わり」です。

礼拝において「交わり」を持つということは、自分の賜物を用いて奉仕をすることです。自分の賜物を用いて礼拝で奉仕をすることによって、そこに「交わり」が生まれるのです。また自分の財産の一部を「献金」することによっても、「交わり」が生まれます。

また私たちの教会では、礼拝後に「小グループ」を持っていました。そこで礼拝で語られた御言葉を皆で分かち合いました。この御言葉を分かち合うことによっても、「交わり」が生まれるのです。

Iヨハネ1:3には、「**私たちが見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えます。あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです**」とあります。教会における「交わり」の基本は、一人一人の神様またイエス様との交わりです。一人一人の神様またイエス様との交わりがしっかりとしていないと、お互いの交わりがうまくいきません。一人一人の神様またイエス様との交わりがしっかりとしていると、お互いの交わりも豊かなものになるのです。神様との縦の交わりがあってこそ、お互いの横の交わりが成り立つのです。

5. パンを裂く

新約時代に生きる教会は、「パン」を裂かなければなりません。「パンを裂く」というのは、聖餐式のことです。聖餐式は、イエス様ご自身が教会に命じられたもので、世の終わりまで繰り返し守るべきものです。

聖餐式は、イエス様の十字架の贖いを覚えるためのものです。パンは、イエス様が十字架で裂かれた体を覚え、杯は、イエス様が十字架で流された血を覚えるものです。私たちは、それを食べ、飲むことによって、イエス様の十字架がまさに私たちのためのものであり、私たちは今イエス様によって罪が赦されていることを覚えるのです。

Iコリント10:16でパウロは、「**私たちが神をほめたたえる賛美の杯は、キリストの血にあずかることではありませんか。私たちが裂くパンは、キリストのからだにあずかることではありませんか**」と語っています。ここでの「あずかる」という言葉は、「コイノニア」という言葉が使われています。つまり私たちが聖餐式にあずかるのは、イエス様との「交わり」なので

す。聖餐式は、食べたり飲んだりします。食べること、飲むことは、私たちの身体を養っていくものです。聖餐式によって私たちは、私たちの信仰が霊的に養われていくのです。私たちは繰り返し食事をして身体を養っていくように、聖餐式も繰り返し行い、私たちの信仰を霊的に養っていくのです。私たちの信仰は、御言葉と聖餐式において、養われ、育てられていくのです。

またパウロは I コリント 10：17 で、「**パンは一つですから、私たちは大勢いても、一つのからだです。皆がともに一つのパンを食べるのですから**」と言っています。聖餐式は、教会の「交わり」を作っていくものでもあります。一つのパンを皆で分かち合うことで、互いに一つのキリストの体であることを覚えるのです。また一つの杯を皆で分かち合うことで、互いにキリストの血を分け合った家族であることを覚えるのです。

聖餐式は、私たちとイエス様との交わり、私たちのお互いの交わりを作っていくものです。そのため礼拝には不可欠なのです。

6. 祈りをする

新約時代に生きる教会は、「祈り」をしなければなりません。私たちの「祈り」のあり方には、二つあります。一つは「個人的な祈り」、もう一つは「共同の祈り」です。

イエス様は個人的な祈りについて多く教えられました。イエス様自身も、ひとりで寂しい所に行ってよく祈られました。私たちは一人で静まって祈る時間を大切にしなければなりません。しかし同時に、教会の皆で「共に祈ること」も大切にしなければなりません。

「使徒の働き」を見ると、誕生したばかりの教会は、よく皆で共に祈っていたことが分かります。教会が誕生する前も、イエス様の母マリヤやイエス様の兄弟たちは、心を一つにして祈っていました（使徒 1：14）。また誕生したばかりの教会は、様々な問題に直面したので、いつも共に集まって祈っていました。使徒たちが捕らえられ迫害にあった時や異邦人教会に宣教師を派遣する時も、共に集まって祈ったのです。

イエス様は、マタイ 18：19-20 でこう言われました。「**あなたがたのうちの二人が、どんなことでも地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父はそれをかなえてくださいます。二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです**」。共に集まって祈る時、神様は祈りを聞いてくださる、またイエス様が共にいてくださると約束されています。一人一人で祈ることも大切ですが、共に集まって祈ることには、特別な約束があるのです。

イエス様が教えてくださった「主の祈り」においても、「天にましますわれらの父よ」「われらの日用の糧を」「われらの罪をも赦したまえ」「我らを試みにあわせず」とあるように、「私の」ではなく「私たちの」と祈られています。「主の祈り」は、共に集まって祈る祈りなのです。

私たちは、個人的な祈りと共に、共に集まる祈りも大切にしなければなりません。礼拝こそ、共に集まる祈りの場なのです。

おわりに

私たちの礼拝は、旧約時代の「会堂」での礼拝を受け継いだものです。賛美と祈りと御言葉を中心とするものです。それにイエス様の贖いを覚える「聖餐式」を加えたものと言えるでしょう。そして、礼拝の中で、誕生したばかりの教会のように、自分の罪を自覚し、「御言葉」によって養われ、自分の賜物を用いて奉仕をすることによって「交わり」を持ち、「聖餐式」によってイエス様の贖いを覚え、イエス様が共にいてくださることを覚えながら皆で共に「祈って」いくこと、それこそ神様から求められている私たちの礼拝のあり方ではないでしょうか。

天におられる私たちの父なる神様。

教会は罪の自覚から生まれ、御言葉と聖餐式によって養われ、交わりによって支えられ、祈りによって前進してきました。私たちの教会も、初代教会に倣いつつ、礼拝を整えていくことができますように導いてください。礼拝においてこそ、主が共にいてくださいます。主の臨在の中で、毎週の礼拝を私たちが聖く守っていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。